

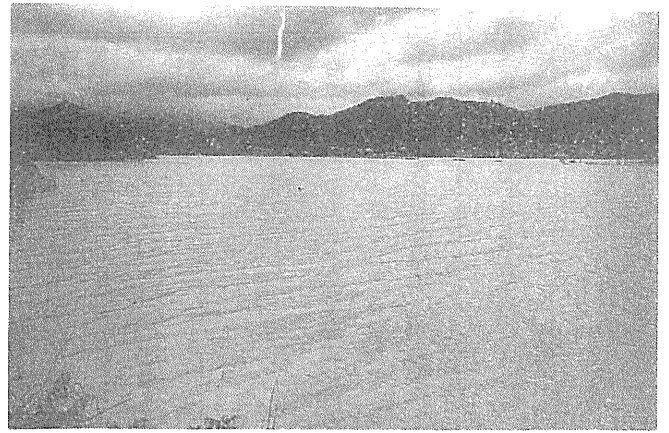
第7章 警備・防災と衛生

明治二十三年の大洪水 柳瀬川、春日川の水系にも毎年大小の風雨にともなう災害があり、平穩無事故の年は珍らしく、際限ない逐年の被害状況をここにあげることにはできないが、中でも明治二十三年（一七一）大洪水は特に春日川災害史上空前絶後のものとして語り伝えられている。その被害の数字的資料は無いけれども、春日川畔に水車の米搗業を営んでいた中村太吉さんが、増水した水車小屋の荷上げ作業中、濁流に押し流され、家の屋根に乗っかって助けを求め叫びながら、ついに下流の水層と消えたことは、佐川水害史上永遠の語り草として残るものである。

台風、洪水

四 水火の災害と病禍

その後この洪水の時より水位が一尺五寸（約九〇センチ）低かったという明治四十一年八月十日の春日川出水に
新町、松崎の床上浸水六、七寸（四五センチ） 佐川町（旧）の浸水二二八戸（床上八一、床下四七） 水没田地六八



一望大海となった加茂（岩目地より本村を望む、50年5号台風）

町歩（六八ヘクター）埋没耕地三反五畝（三、五アール）山崩三ヶ所、橋梁流失一、破損二、堤防欠壊五三箇所及び、篤志者川田豊太郎は放出米をもって罹災者に炊出しを行ったとの記事がある。その外柳瀬川水域各村では、斗賀野国道欠壊一五間、橋流失三、尾川水没田地一五町歩、黒岩浸水八〇町歩、埋没二町歩、堤防欠損一一八間、加茂軒上浸水三〇戸、水没田地二〇〇町歩の記録をのこしており、仁淀川水域にいたっては、仁淀川の水位平時より二丈五尺（約九メートル）昇上、床上浸水五二戸、水没耕地五〇町歩で、越知の坂折橋は流失したという。二十三年のそれは推して知るべしである。

昭和五十年五号台風と洪水 「百年に一度」といわれ、「災害は忘れたところにやって来る」という。その災禍ははたしてやって来た。昭和五十年八月十七日襲来した五号台風は高吾北、吾南地方に集中豪雨をもたらして、仁淀川、柳瀬川流域は氾濫した。とくに柳瀬川上流の尾川では各地に鉄砲水を噴き出し尾川川は奔放、松ノ木、古畑付近は田畑も砂礫に全没して道路は寸断されたが、尾川川の濁流は由留岐橋を一瞬に流して柏原、岡崎、虎杖野から、柳瀬、九反田、富士見町、西佐川にかけて一望の海となって氾濫、大半の家は床上浸水軒下の半に達し、富士見町商店街では店頭の商品を流失、退水の後は床上も床下も泥土に埋まった。そして床上浸水六四四、半壊二七九、流失三、その他、耕地、堤防、道路など多大の損害で、その被害総額は百億を越え、死者二人、軽傷四〇人を出した。

た。

そしてこの柳瀬、春日川水系の復旧工事は爾後四年にわたって総工費百数十億を費し、県の復旧対策によって開拓営団の工事設計のもとに行われた。

その他の天変・地災

暴風雨 明治十七年八月二十五日の暴風雨には全域に大被害があったが、とくに斗賀野村では一一戸が倒壊した。翌年は珍しい豊穰で、豊年踊りが盛に行われたが、翌一九年には又々大暴風雨あり、佐川に潰家四三戸、半壊三二戸、負傷四、斗賀野に潰家三八、半壊二〇、死人一（梁の下敷、負傷三、尾川潰家八、半壊一六、永野潰家八、半壊一二という被害を見たが、佐川小学校の女生徒溜席が破損したため、不用となっていた旧佐川中学の校舎を一時借用したという。とくに大木や植木の倒伏が目立ち四方の山々は枯枝の葉で赤く見えたという。またこの年はこれに先立つ六月二日降雹あり、とくに尾川村の被害が大きかった。

明治二十年十月十九日の洪水には佐川新丁に床上浸水多く、深いところは膝下に達し、新町筋は水位二尺（二〇センチ）、横町は奥の土居の谿水溢水、新市町に西谷の谷水がおし寄せ、上郷には所々山崩れあり、宮岡某の居宅は泥水に押流され土砂に家財道具を埋められた家もあった。斗賀野西組、鳥ノ巣方面では稲束の流失が多く、佐川小学校の裏山が崩壊して新築半の校舎の一部を流された。

明治二十五年、同二十九年も暴風被害あり、同三十二年八月二十八日の台風には旧佐川町に倒伏二四戸、半壊七戸、大破三二戸、負傷者三名、家畜死一の被害を見た。同三十六年八月十五日大雷雨あり、斗賀野村狩場の小野山丑弥方家屋に落雷、縁側に遊んでいた三女栄さん（一一歳）が感電死した。こうして明治から大正のころには毎年

のように大小の暴風洪水禍があった。

昭和年代になっては同三年七月二十一日の台風出水で柳瀬、春日川流域の災害大きく、下流黒岩では水稲三〇町歩、桑園一八町歩が冠水、流失、荒廃田一町歩、十数戸の床上浸水があった。同十七年九月二十三日午前十一時ごろ急襲した台風は多くの家を倒し、半壊は全戸数の一割に及んだが、このとき斗賀野小学校の講堂（五間―二間）が倒壊し、「さくららの佐川」一目千本並木や、妙像寺前県道などの桜並木は根こそぎ倒伏したが、このころはまだ何等の天気予報や台風予告など無い時代であった。

昭和二十五年九月二日の暴風雨には終列車で高知より帰り帰宅中の鳥ノ巢の婦人が丸山川に落ちて流れ、死体を翌朝下流角の本橋の下で発見した。昭和四十五年八月二十一日の台風一〇号には被害が甚大だったが、わけても斗賀野大平の酪農家秋沢昭一さんが、搾乳出荷の帰り、飛んで来た家屋の下敷となって死亡した。その他年々の台風災害は枚挙にいとまがない。

降雪 大正五年十二月二十七日の大雪は一尺（四〇センチメートル）に積み八十歳の古老も未だ見ずとおどろいた。昭和八年十一月十二日の降雪は未曾有の早雪でまだ冬支度のない家々をふるい上らせ、同二十六年三月中旬の降雪はかつて無い遅雪で、当時栽培盛だった菜種の花の黄を覆い、同三十年十二月中旬から、翌年三月上旬まで毎日間断をおいて降りつづけた雪は消える間もなく、蔭地の雪はそのまま凍結して二ヶ月以上も土を見ず、植林や、竹林など被害が多かった。

降雨と旱魃 昭和五年十月一ヶ月にわたる長雨には晩稲の大半は発芽したが、同十八年初夏の六月から七月にかけて間断ない四十日間の長雨は、折柄太平洋戦時中の食糧欠乏の時代とて大恐慌をおぼえ、学校、工場など広大な建築物はすべて収穫中の麦の乾燥場に当てられた。昭和三十八年の五月中旬から七月下旬にわたる二ヶ月余の長雨には麦の刈取り乾燥ができず、ほとんどは田圃に立毛のまま腐り枯れてしまったので、田圃で雨間を見て焼却する



麦を焼くけむり

煙が連日村中に流れ、収穫は皆無であった。

明治六年の旱魃は五四日間続いたといわれ、同十二年の大旱魃には河水も全く涸れ、路傍の草木も枯死したという。明治二十六年七月五日より八月五日に至る一ヶ月間雨を見ず、植付後の稲は枯死、甘藷の植付もできず、佐川町では有志数十名が役場に会して雨乞いを議するなど騒然とした惨状を呈した。八月五日に沛然とした豪雨を見たが、時既に遅く、当年は大減収であった。翌二十七年も旱魃で、二年つづきの旱害に町民は喘いだ。昭和十五年六、七月の二ヶ月にわたる旱魃には植付後間もない乾田地帯の稲は殆んど枯死したが、戦時中の食糧配給にもなう増産時代のこととて大変であった。同二十四年の旱魃も六〇余日雨滴を見ず稲の枯死が多く、乾田地帯は白干の亀裂が大きかった。昭和後年になってからは、降雨の被害は大きくても、こうした甚だしい旱魃は見られなくなった。